

No.2602

「地域を離れた」華人にとってのインドネシア西カリマンタン地域

東京大学大学院総合文化研究科 学術研究員

松村 智雄

東南アジア諸国が独立した後、この地域の華人はそれらの国民国家の成員となるか、それとも「中国人」であり続けるのか、という政治的に両立不可能とされた選択を迫られ続けた。国民国家の成立とともに、その政治的な圧力により、華人は居住国に同化していったという理解の方法の一つにはあるだろう。しかし、華人自身の行動や思考、彼らの世界観をこれだけに限ってしまうとしたならば、彼らのたどった歴史の一面しか理解したことにならないのではないか、という疑問が本研究の起点にある。

主な研究対象としたのは、インドネシアの中でも特に華人人口が多い西カリマンタン地域である。西カリマンタンは隣国マレーシアのサラワク州と陸続きであり、サラワクやシンガポールとの関わりの方がジャカルタとの関わりよりも強かった。このような性格を持つ西カリマンタンにおいては、一方でスハルト体制期にインドネシア化が進むものの、その一方で、中国、台湾に移住する華人も多かった。彼らを一般に帰国華僑と呼ぶ。彼らにとってのインドネシア、特に西カリマンタン地域はどのように認識されるかをテーマに研究を行った。

1年目にあたる2014年度には、香港におけるインドネシア華人（主に西カリマンタン出身者）コミュニティの調査、および1950年代インドネシア最大の華校であったジャカルタ中華中学同窓生の中国、香港におけるネットワークに関する調査を行った。香港で活動するインドネシア華人の研究グループは、1950年代にジャカルタで発行されたが、インドネシア本国ではスハルト体制期に失われてしまった『生活報』の復刻版、記念叢書を出版するなど独自の歴史研究を行っていることが明らかになった。この研究によってインドネシアではほぼ不可能であった1950年代の華人社会に関する研究、また香港や中国で暮らすインドネシア華人がインドネシアをどのように認識するのかということを追究する道筋がたった。現在は、主に香港の帰国華僑コミュニティに対しての人類学的調査を行っている最中である。またこれに加えて2年目は、台湾にも範囲を広げて調査を継続する。